

ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市

田宮 治

色んなことがありました…



⑥ 単独猟の基本は…

● 単独猟Ⅱ猪犬の条件

■ 訓練所ではできない猟犬芸

(1) イノシシの「起こし芸」(発見)

と「寝屋鳴き」

実猟において、猪犬達が一番先にきちんとしなければならぬこと、それがイノシシの「起こし」である。まずは、猟犬がイノシシを見つけてくれないことには猟にならないのである。

イノシシの掘り跡から放犬すると、良い犬はイノシシの臭いに乗って、難なく突き止めてしまう。しかし、これができない犬が多い。特に、訓練所だけで仕込んだ犬の場合は、攻撃も追跡も目の前のイノシシだけ…ということが多いように思われる。

イノシシの臭いに乗って追う芸は、やはり山野に引き込むことによつて身につくのだと思う。つまり、見て追うのではなく、イノシシの足跡の臭いに乗って突き止めることと、もう一つは、イノシシの体臭を取って寄り付く芸を覚えさせることである。

イノシシの体臭を拾いながら主人の近くを狩り進む中で、ベテラン犬は必ず高鼻を使って猪臭を取り、立ち止まっては耳で音を拾う。

そして、ポインターなどと同様に「ポイント」のような仕種をするのであるが、これが「イノシシの認定」である。

きちんと目標をつかむと、少しスピードを上げて姿を消すのであるが、ここからのイノシシへの寄り付きが問題で、いかにイノシシに気づかれずに、素早く寝屋の前に立てるか猪犬の最大の課題となる。さらに、発見したイノシシを、そのまま「寝屋止め」できるか、早立ちされて飛ばれてしまうか、まさに正念場と言える。

「追跡犬」は、足跡よりも「香り鳴き」で寝屋に寄り付き、寝屋に吠え込んでイノシシを起こす。そして、イノシシが飛び出したときから「本鳴き」で本格的な追跡が始まるのであるが、「止め犬」の場合は、決して無駄鳴きをしないこと。あくまでも素早く、静かに、寝ているイノシシの前に立つのがベストである。

流し猟で、目の前を小気味よく狩り進んでいた犬群がスーッと(全犬)姿を消すことがあるが、イノシシが寝ている所への接近は、まさにこの「スーッと」という忍者のような行動が大事である。それだけでなく、犬群での猪猟は雑音を



100kg超の牝猪。小板橋氏(左)と筆者

発しやすく、イノシシに気づかれやすい。イノシシに気づかれ早立ちされたのでは、いくら足の速い一流犬群であっても、近くで追いつき止めることなどできない。イノシシがノテ(逃げ道)に乗って逃れる速さは、その体からは想像もできないほどの速さである。それゆえ、寝屋で止められれば、それが一番の芸であるが、犬群を突いて寝屋から飛び出したときに、そのイノシシをノテに乗せない素早い「咬み」も猪犬の大切な「止め芸」であり、成長につれて磨か

れていく楽しみのも一つでもある。イノシシの逃げ道を断つ素晴らしい「咬み止め芸」は、イノシシとの攻防において、あらゆる場面で通用する、猪猟において欠かすことのできない基本芸であると思う。この芸の目的は、イノシシが逃げようとすると、素早く後足などに「口を掛ける」ことであり、強引に食い下がるのではなく、あくまでもイノシシを怒らせて、その場に留めおくことにある。イノシシが止まるまで口数(咬む回数)多く、両足に咬み込むことである。なお、咬み止めている間は必ず鳴き続け、寝屋起こしのときから、止めて撃ち獲るまで全犬が鳴き通すことも大事である。イノシシを止める重要なポイントが、実は「鳴き声」と「吠え込み」である。なぜなら、せつかくイノシシを起こして止めきつても、鳴かない犬では、主人は気づくことも駆けつけることもできないからだ。猪猟において、鳴かない犬ではどうしようもない。鳴かない：これは意外と強い犬に多く、他の芸が良くても使えない：ということになる。

猪犬が鳴くのは、①主人に知らせる。②友犬に知らせる。③イノ

シシを怒らせて止め、パニックに陥れる：などであるが、何と言っても、よく使っている犬群ならば、主人はその鳴き声で「止めた」「飛ばれた」「また止まった」など、犬群の行動がわかり、次に打つ手を確実に判断できる。鳴かない犬では、主人は動くこともできないことになる。

さて、これらの猟芸は訓練がしばらく、猟犬の優れた血を受け継いだ「本能」とも言うべきところが多いと思われる。それゆえ、一流芸の先犬に付けて数多く猟野に引き、その現場での修行を重ねさせることであろう。具体的には、鼻の良い、足の速い、耳の良い、賢い、少しシャイ気味の子犬であることが「最高の猟犬」への条件となると思っている。

そして、寝屋起こしと言えども、撃ち獲ったイノシシは思い切り咬ませてやるのが大事で、それ以上の訓練法はないと思っ



鳴き止め犬「クマ号」と「ラン号」。きちっと止め、寄せ鳴きも必ずする

猟犬がイノシシの寝屋に寄り付き、必ずやらなければならない大事なことは、はっきりとした声で鳴くことである。これが「知らせ鳴き」とか「寄せ鳴き」と言われる。「寝屋鳴き」である。「イノシシが居たぞ」「みんな集まれ」と、元気な区切りのある声で「ワン・ワン・ワン」：鳴く愛犬の声は、静寂を破る心躍る知らせであり、「よし、イノシシだ」と、心も身体も決戦モードに切り替えるときでもある。あくまでも冷静に、素早い寄り付きが期待される場所であり、単独猟人の腕の見せどころである。

●単独猟Ⅱポイント(1)

■鳴き止め犬による「寝屋止め」

(吠えてイノシシを止める)

(2)寝屋撃ち

単独獵の醍醐味は、「止め犬」が寝屋止めした大猪を一発で撃ち獲ることにある。愛犬の力強い鳴き声で、突然知らされる大猪への宣戦布告は、まさに心躍る瞬間であり、さながら「猪山城の本丸攻め」といったところである。わが犬群によつて外堀は埋められ、大猪は牙を鳴らしての籠城である。

籠城するからには、その寝屋は難攻不落の名城であり、寄り付き



咬みも素晴らしくなった「ゲン号」

づらい危険な所か、はたまた見通しの悪いブッシュの中と決まっている。わが犬群は出口を塞ぎ、ラウンドをかけて大猪との攻防を続け、その一方で鳴いて主人を呼び続ける。主人が駆けつけるのが遅いと、一流芸の犬達は迎えにも来る。こうなると、「人犬一体」だ。迎えに来た愛犬は、盛んに尾を振り、何かを知らせるように、主人の先を進んでは戻る…を繰り返す。このような行動をする犬は、話そそでないが気持ちが良い、賢くて優しく、勇気のある犬である。犬舎においても、私が友犬を撫でると、自分も顔を寄せてきて「撫でてよ」の仕種をする。また、私が犬舎を出ようとすると、「出ないで」とばかり、前足を私に絡めて抱きついてくる。

さて、鳴き止めた寝屋のイノシシに主人が寄り付くのはとても大変なことである。決して音を立てたり、乱暴な寄り付きは禁物である。気持ちが悪るところだが、この場合に大切なことは、イノシシが獵人を発見するよりも早く、こちらがイノシシを発見することである。先犬が吠えついている先を見極めて少し進み、また鳴いている犬の先を見て進むのである。

獵人は、何としてもこの寝屋でイノシシを発見して撃ち獲るのが一番である。当然のことながら、寝屋での捕獲チャンスは逃すと、寄り付きも大変になるばかりか、発見も撃ち獲ることも難しくなる。イノシシは本来、臆病で(用心深い?)、寝屋で寝ているときでも、いつでも逃げ出せるように、入口に一番近い所で寝ている。つまり、外敵が近づいたときに発見しやすく、逃げやすい所に居るのである。それは、ちょうどノウサギと同じである。ノウサギは、雪で倒れたスギやツバキの下などに寝屋を作るが、深い雪の中まで続く穴の入口近くに寝ていて、タカなどの襲撃には穴の奥深くへ逃げ込み、決して雪原には飛び出さない。しかし、獵犬や巻き狩りの人間の接近には、いち早くこれを察知し、穴から飛び出して一目散に逃げる。イノシシも全く同じである。強い咬み犬が吠え付いて寝屋に飛び込めば、間違ひなく飛び出して逃げることになる。また、獵人の乱暴な接近にも同じように早立ちする。早立ちされたイノシシは、いくら足の速い一流犬でも簡単に止められないし、止めたとしても遥か遠い所であり、獵にはならない。

特に関東地方の山は、大山で下草がなく、イノシシが止まりづらいうえに、その数も少ない。こうした条件でありながら、入れ替わり犬を掛けて狩り込んでいるので、当然イノシシも攻防に慣れて強くなり、そのうえ早立ちするような状況である。鳴き止めで、寝屋で良い仕事をする犬達は、注意して見ると、イノシシの出口を塞ぐように陣取り、逃げ道を断ち切って鳴き続ける。そして、決して寝屋には飛び込まない。

近づきすぎたり、イノシシの攻撃に誘われて寝屋まで吠えて飛び込めば、イノシシは必ず犬を突き飛ばして逃げにかかる。「イノシシが飛び出さない、絶妙な間の取り方で、しかも区切りのある声で鳴き通すこと」が寝屋止めの第一のポイントである。

イノシシもまた、犬達のこのような芸にはまって、寝屋に籠城を続けるのは、「なんだ、このチビどもが…」とでも思っているようで、飛び出して逃げるよりは、寝屋に居続けるほうが安全に身を守れることをよく知っているのだ、奥に陣取って攻撃を仕掛けるのである。

このように、鳴き止め犬の「寝

「屋止め」は、犬が「力」で止めているのではなく、「術」で止めていると言えぬ。イノシシは、身を守れる安全な場所だから勝手に止まっているのであり、もしも危険を感じたなら、いつでも犬を突き飛ばして逃げられる状態にある。

イノシシは、飛び出して逃げる場合も、当然のようにまずノテ(逃げ道)に乗って山の上を目指す。このことは、撃つときの参考になるので、ぜひ覚えておいてほしい。

イノシシがノテに乗って逃げ出しても、何時間でも止める実力犬なら、これを逃がすはずもなく、追いつき、咬み込みでイノシシを怒らせ、必ず近くで止めるが、イノシシにも余力が残っているので、戦いに有利なブッシュの中や岩場に逃げ込むのである。

このように、寝屋から出て二番目に止まる場所も、決まって姿が見えない所である。鳴き止め犬の「止め」の現場、イコール「イノシシが姿を隠して止まった条件の悪い場所」ということになる。そこに獵人が近寄ると、三たび飛び出して逃げ、犬に追われてまた止められ、獵人はまたも苦勞して近寄る…。この繰り返しである。

獵人は、ここは落ち着いて、少

し遠くからでもスコープをフルに活用し、何とかイノシシを発見し、必殺の一撃を送り込む以外にない。飛ばれ始めると失敗することが多くなるが、これも「逃げられる」と思う焦りからである。状況は、見通しの利かない藪の中であるから、犬群と自分、そして周囲(特に矢先)の安全を、慎重に注意深く見極めながら、必ず一発でイノシシを倒すことである。このときも、焦りは禁物である。

全犬で発見したイノシシを、そのまま「寝屋止め」できる芸は、よほど素晴らしい犬揃いでないと無理である。まして「クマ号」のように、あの小さな体でこの芸を完全にこなし、私を迎えにまで来られる犬は、やはり「一流犬」だし、私の「宝犬」だと思っている。私は、この「寝屋止め」芸を完全に成し遂げられる犬こそ、実獵犬での「名犬」であり、猪犬としての最高芸が「寝屋止め」だと思っている。

鳴き止め犬による「寝屋止め」と言うと、鳴きだけでイノシシを止められると思いがちだが、1頭で鳴き止めや追い止めができる犬は、当然のことながら総合芸が素晴らしい。特に咬み止め犬並みの

咬みがこなせる犬でなければ、イノシシを止めることはできない。そんなわけで、この芸をやっている犬達の「つる」を何とか世代まで繋げていきたいと頑張っているところである。「天下の名芸」と語り継がれている「寝屋止め」である。ただこの芸の完結は、主人の腕にかかっており、何としても犬群にその実力を見せつける必要がある。

●単独獵||ポイント(2)

■咬み止め犬による「寝屋止め」

(3)止め撃ち

強力な咬み犬軍団を使つての「寝屋止め獵」である。

私は、消極的な「鳴き止め獵」よりも、積極的な「咬み止め獵」のほうが好きである。たぶん、私の性格がそうさせるのであろうが、使っている一軍の犬群も、そのほとんどが咬み犬である。「人畜無害」という点を除けば、みな強力な「咬み」と「絡み」が身上の犬群である。

あくまでも、私の愛犬達が実獵の場でいつも行っている「寝屋止め」であるが、この獵法は百戦錬磨の猪犬軍団なくしては、成立しない。単独獵では、何と言つても

「寝屋止め」がイノシシを撃ち獲る一番のチャンスであるから、そのときの勝利方法をよく知ることが大事である。

寝屋を中心としたイノシシの捕獲には、誰もが人知れず努力して編み出した「自分流の方程式」があるはずで、その方程式に則ってすぐに答えが出せるように取り組むべきである。獵人としての知識や技術、愛犬の実力、狩る山の状況：等々、自分でなければ計り兼



咬み止め!! 向こう側は咬み止め犬の「富士雄号」と「ケン号」。イノシシはダウン。手前は鳴き止め犬の「ラン号」(左)と「クマ号」(右)。鳴き止め犬でもこれくらい咬み止める必要がある



咬み一番、「ブル号」のお手柄

ねる大切な事柄を最大限駆使し、イノシシに勝つために集中して挑むことである。

単独猟では、この「寝屋止め」のイノシシをどのように撃ち獲るかが全てであり、ここで逃がしたのでは何にもならない。寝屋のイノシシに犬群が寄り付き攻撃を始めるると、強力な咬み犬の力に、イノシシは危険を感じ、寝屋を捨てて外へ飛び出し逃げようとするが、一流犬群ならこれを逃がすはずもなく、素早い咬みと、山が割れるような絡み鳴きで、すぐ近くでイ

ノシシを止める。

咬み止めの場合、寝屋を出たイノシシを最初に止めるのが「すぐ近い場所」か、あるいは「遠い場所」かが勝負の分かれ目になる。

イノシシの体臭を取っての寝屋への寄り付きは、咬み止め犬も全く同じであるが、全犬が運良く寝屋に寄り付いても、犬群の力が強いと、2〜3頭がそこに留まることのできずに、寝屋に飛び込んで攻撃する。

そうなると、イノシシはたまたまず寝屋を捨て、犬を突いて飛び出し、ノテに乗って山の上を目指すのであるが、犬達は素早い咬みと絡みでイノシシの逃げ道を断つ。

そしてイノシシは、耐え切れずに下へ下へと落とされることになる。

このように、イノシシを逃げ道に乗せないのが強い犬群の実力であり、イノシシは方向を失ったことで、犬群の攻撃をまともに受けることになり、その近くで止められるか、一直線の谷落としになるか、全犬が絡みながら山が割れるような鳴き声で谷落としする様は、何度見ても凄まじさを感じ、これこそ誰もが認める猟犬の「一級芸」である。

私は、このような咬み止め芸こ

そが「猟犬芸の極め」と思っており、このような芸ができる実猟犬作りに取り組み、この素晴らしい血を守り、次世代に残る子犬作りに挑んでいるのである。

単独猟では、犬群の力がイノシシに勝り、「力でねじ伏せる咬み止め」でなければ、決してイノシシを獲ることはできない。寝屋でそのまま咬み止めるか、イノシシが寝屋を飛び出しても、最初に止まる所で必ず撃ち獲る：そんな猟芸のできる猟犬作りを常に心がけ、試行錯誤しているところである。

寝屋を飛び出したイノシシが最初に止まる所が問題である。大抵の場合、まだイノシシにも余力があるので、障害物を利用して身を守ろうとする。例えば大木の根元や大岩の陰、沢なら水のない滝つぼなどに陣取る。特に滝つぼなどで下半身を守りに入ったイノシシはとても手ごわく、ベテラン犬でも要注意である。

しかし、犬群も心得たもので、このような場合は、イノシシの逃げ道を断つ形で比較的大きく囲み込み、次第にイノシシとの距離を狭めていく。そして、突進して来るイノシシの一瞬の隙をついて攻撃する。先犬が鼻や耳に咬み込む

と、それを合図(?)に、全犬がなだれのように咬みつくのである。

犬達は、その役割が決まっているかのように、耳を咬む犬、両手・両足に咬みつく犬と、強烈な咬み込みで食い下がり、イノシシの関節をガタガタにしていくな。中には、尻に咬みつく犬もいる。こうなると、イノシシも最後の力を振り絞り、下方を目指して飛び出す。犬達も「逃がしてなるものか」と、咬みながらダンゴ状態で少し離れた所でまた止める。

二番目にイノシシが止まる場所は、イノシシが自ら選んだ場所ではなく、強力な犬群の咬みによつて止められた場所であり、ここでは全身丸出しの状態になり、下半



強力な咬みは頭に行く。先犬「富士雄号」

身を執拗に咬み込まれる。こうなるとイノシシは、「ギーギー」「ブウブウ」と、まるでプタのような声になり、力尽きて腰を落としてしまうのである。

こうなれば「しめた」もので、逃げて同じことなので、何の心配もない。要するに、勝ち戦である。猟刀で止めを刺すのもよいだろう。ただ撃つ場合は、反対側の犬まで注意する必要がある。散弾銃なら、銃口をイノシシに近づけて撃つのが一番である。

戦力がイマイチの犬群の場合、特に若くて気の強い犬ほど真つ先に突進し、必ずと言ってよいほど牙にかけられ突き飛ばされる。愛犬が「ギャン」と鳴き、次々に飛ばされるのを見たとき、大抵の猟人は度肝を抜かれ、われを失う。

そのような失敗をしないためにも、若犬をイノシシに掛けたときは、鳴き止め犬に付けて仕込むこ



今年、売り出し中の咬み止め犬「富士号」(左)と「ゲン号」(右)

とである。基本的には、犬群の力がイノシシに勝つ場合は、イノシシは全身丸見えの状態で止められ、寝屋を飛び出したイノシシも決して山の上を目指すができず、下へ下へと咬み落とされ、沢などで止められる。

相手が犬群の場合、意外と簡単に止まるが、ここからが正念場である。もちろん、犬群は犬群の執拗な咬みで止まったのであるが、障害物などで下半身を守りながら

止まっており、その一方で「うるさい犬達だなあ、ひと勝負やつてやるか」と、攻撃態勢の準備をするので、くれぐれも注意したい。

猟人も怒り狂った犬群の前にすると平常心を失いがちであるが、ここは落ち着いて、あまり近づかず、できれば撃ち込みのチャンスを持つべきである。主人が近づくと犬群は張り切る。そこで、迂闊に咬みに行けば必ず牙にかけられる。障害物などに身を守るように止まった犬群は、いかに咬みの強いベテラン犬群でも、力でねじ伏せるのは困難であり、ましてどんなに強い犬でも、1頭で咬み止められるものではない。

滝つぼなどで身を守ろうとする犬群に対しては、犬群も心得たもので、決して無理な飛び込みをせず、何時間でも向かい合って吠えつき、攻防を続ける。このようなときこそ撃ち獲るチャンスであり、猟人の腕の見せどころである。

台本どおりに犬群が突いて出て来る。犬がバツと飛び退く。このとき、必殺の一発を送り込むのである。また、突いて出た犬群が意気揚々と元の場所に戻り、クルツと向きを変えてこちらを向いた：その一瞬を狙うのである。緊張と

興奮でドキドキし、スコープが大きく揺れるので、銃を小さな木に添えるか、あるいは、しゃがんで様子を見ている場合は、そのまま座つての膝撃ちで、必ず一発で仕留めることである。

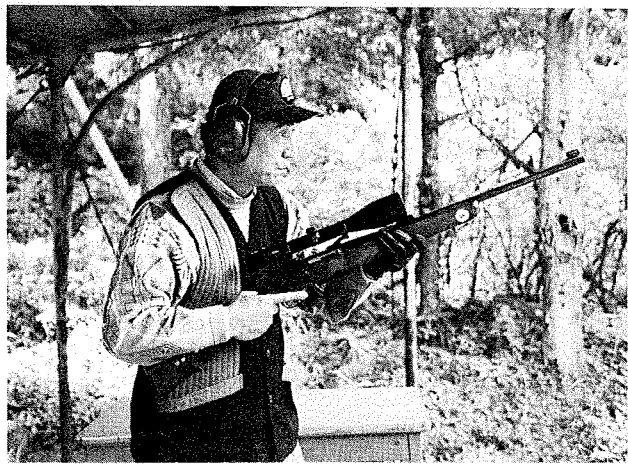
決して焦らず落ち着いて、犬の動きには十分注意することである。犬群は同じ行動を何度も繰り返すので、それだけチャンスも多くなる。ただ、元気な犬群の牙を鳴らしての攻撃は凄まじく、犬群もその突進を必死に交わし、隙あらば咬み込もうと殺気立っている。

こうした場面は、何度経験しても平常心でいられないが、それだけ猟人が心ときめく瞬間でもある。あくまでも冷静に行動したいものであるが、咬み止めたイノシシへの寄り付きは、犬群が命を張って止めているので、一刻も早くしなければならぬ。風の向きなど考える必要はなく、とにかく全力で寄り付くことである。

単独猟では、咬み犬群で止めた犬群を一発で撃ち獲ることこそ、醍醐味である。

● 猟犬の「戻り」の重要性

子犬の分譲などで猟人から訊かれることは、まず完成したときの



単独猟では遠射も大切。必ず一発で…(西富士での動的射撃)

「猟芸」についてである。「鳴き止めか、咬み止めか？」に始まり、次に「足はどうか？」「鳴き声はどうか？」、そして「戻りはどうか？」である。

順番は別にして、猟場における

猟犬の「戻り」は実に大切であり、それがきちつとできる猟犬であつてこそ、安心して猟野に放せるのである。「戻り」の良いことは、立派な猟芸の一つである。逃げるイノシシを追って行ったとき、2時間も3時間も帰って来ない犬ではどうにもならない。「追い犬」(これは3時間くらいは平気である)であれ「止め犬」であれ、放犬場所には必ず帰るのが猟犬として当たり前である。

私のように、はるばる遠くまで出猟する場合、帰らぬ犬探しほど興奮させることはない。猟犬が放犬場所に戻るの当然であるが、問題はその時間である。自慢するわけではないが、私の使用犬の場合、イノシシを追って行き止められないときは、約1時間を限度に必ず帰って来る。

遠くで止めているときは、当然長くなることもあるが、そんなときは無線ではつきり確認できるので、車で移動して撃つこともしばしばある。また、全犬寄り付いての止めは、犬が戻らないことではないので、無線に入った場所が寄り付ける範囲なら、何時間かかったも当然、そのイノシシを撃ち獲ることに全力を傾ける。

山での「流し猟」で、イノシシが早立ちして、離れた所で追い鳴きに変わり、その声やがて無線にも入らなくなる。そのように、逃がしてしまったときでも、腰を下ろして待っていると、大抵の場合はずぐに戻って来る。ある意味で、私の犬達は少し諦めが早い

かも知れない。

シカを追ったときなどは、私はその後を追うことはしない。また、イノシシであつても、この老体ではどこまでも追う元気はなく、駆けつけられる範囲を超えたと思うと、追うことをやめてしまう。そのためか、最終的には放犬場所には必ず戻るのであるが、流し猟が途中の場合は、イノシシが出たその付近に全犬戻って来てくれる。

「逃げられたか…、よしよし」と頭を撫でてやり、リュックにいつも用意してあるソーセイジなどを取り出して与える。そして、少し休んで「よし、行くぞ」と、また続きを狩るのである。このような「流し猟」ができれば最高であり、単独猟には、このように戻りの良い犬達が欠かせない。

こうした犬達の「ツル」は、意外とシャイな子で、他のグループや近くの民家にも寄り付かず、飼い犬や他のグループ犬とも決してケンカはしない。人畜無害であり安心して猟のできる犬になる大切な「ツル」だと思っている。

単独猟では、人について行った最近のイノシシは、平気で家の近くで寝ていたりするので、これか

らは放犬しても大丈夫な、このような「血」がますます求められるようになると思うので、大切にしなければと思っている。

いずれにしても、戻りの悪い犬では、遠い猟場するときなどは家に帰ることもできないので、「戻り」については子犬のときからしっかりと取り組むべきである。私は、子犬のときに「戻り」の訓練をしているので、追い犬のブルーチックでも3時間を限度に必ず車に戻って来る。戻りの悪い犬では、犬探分に苦労するのは必定で、猟の気分には浸るどころではない。

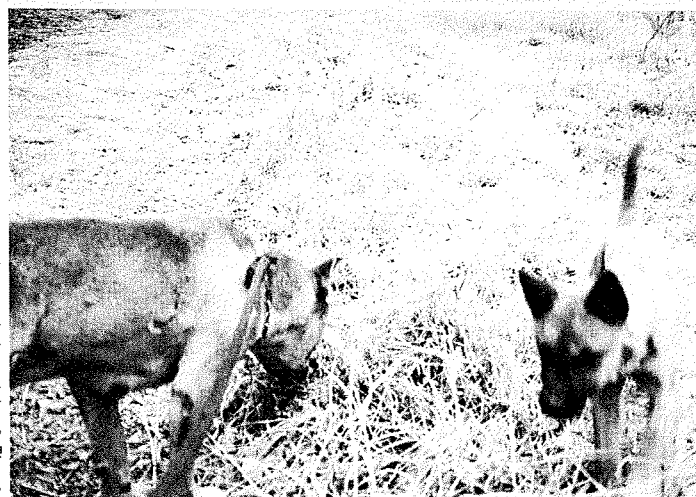
さらに戻って来ても、なかなか捕まらない犬もいるが、これらも



必ずマーカーを付けること。止めの現場に寄り付くため。決して帰りが悪いからではない

含めて全て子犬時の教育で決まるので、その仕上げに注意しなければならぬ。すぐ傍まで来ても捕まらない子犬は、追いかけて捕まえようとしてはいけない。一番良いのは、山で一緒に回れるようにする中で、時々呼び寄せ、「よしよし」と頭を撫でるときに、「ジャーキーでも少しあげて」「よし、行け」と言ってまた歩く。

この繰り返しの訓練で、山回り



訓練は1頭を繋ぎ、子犬は放す。「ブル号」(左)がケガで休み中の訓練

ができるようにするのであるが、その帰り道、つまり、車に戻る少し前に子犬を呼び、このときに引き綱を付けるのである。そして、「よしよし」と頭を撫でてジャーキーをあげる。それから、「よし、行こう」と車まで連れて来たら、車のドアを開け「ハウスノ」とか「乗れノ」の大きな合図ひと声で、強制的に乗せる。乗ったら引き綱を取り、「よしよし、よし」で、またジャーキーをあげる。

子犬時に、すぐ傍まで来て捕まらないのは、大抵の場合が「車酔い」する犬で、車に乗るのを嫌がつているのであるが、前述の方法で、だいたいは戻るようになる。

また、どうしても山回りのときに、追って行ったまま戻れない犬は、仕方がないので犬箱にドッグフードを入れ、車の所(放犬場所)に置き、泊まってもらうことである。このとき、忘れてならないことは、犬箱に住所・氏名・電話番号と、「よろしくお願ひします」などの一文を添えるようにする。

翌日、その場所に行くとき、ほとんどが戻っているが、中にはイノシシとの攻防で傷ついたときなどは、3日もかかることもあるので、その場合は何日か通うことになる。

そのとき、もし戻っていないから、友犬2頭ほど(猟期なら)も一度イノシシを狩ってみることも必要になる。途中から、いつの間にか2頭が3頭になっていることもある。

こうして発見したときは、主人としてはこの上なくうれしく、こうしたことを何度も繰り返して立派な猟犬になるのである。

犬箱に戻っている犬は、どんなに腹が立つても、決して怒ってはいけない。むしろ、獲物を獲ったときと同じ気持ちで、「よしよしよし」である。ジャーキーをあげて抱き上げ、優しく撫でてやれば、子犬も寂しく心細かったに違いないので、全身で喜ぶはずである。これを2〜3回も繰り返すと、必ず戻って来るようになる。

車のドアを開けて、「ハウスノ」とか「乗れノ」で、すぐ飛び乗るようにしておきたいものである。狩り終わって戻った犬達のその様子一つで、よく仕込まれていることがわかり、実に気分が良いものだ。また、このような犬達を引いている猟人は、必ずと言ってよいほど猟技術も素晴らしいものを持っている。

猟犬の「戻り」は、簡単な訓練

のように見えるが、一番根気のいる難しい訓練である。猟犬が戻って来るのが当然の猟であつても、もし戻って来なければ、疲れた身体に鞭打つて、もう一度大山に入り、居なくなつた所まで戻らなければならぬことや、また、シーバー音まで途切れてしまい、どうしようもないときの心細さは、猟人なら誰もが経験する最悪のパターンである。

殺された？ 罠に掛かった？ 連れ去られた？ 等々、悪いほうへ悪いほうへと考えながらも、暗くなつた荒野を探さなければならぬような猟犬にだけはしたくないし、してほしくない。大切な猟犬を失うことにもなりかねない。もし、「猟などやつてられない」と思うときがあるとすれば、暗くなつて愛犬を探すことができずに、疲れて動けなくなつたときであるような気がする。

猟友がいれば、迷惑のかかることになるし、気分の悪い思いをさせることになる。荒野では、いつも楽しく安全な猟をしたい。そのためにも、猟友との信頼関係を築くためにも、必ずやつておかなければならない基本芸が、この「放犬場所に戻る」訓練である。